

企業と進化の問題

笠原俊彦

1

この小論におけるわたくしの課題は、人間の進化と企業との関係についてわたくしが当面している問題の概略を示すことにある。

人間の進化と企業との関係の問題を、わたくしは、とりわけ、企業との関わりからみた人間の進化の問題として考察したいと考えている。すなわち、わたくしは、人間の進化一般を問題にしようとするのではなく、人間の進化が企業と関連する側面をとくに中心として問題にしようとするのである。このことこそ、わたくしが、この小論の題名を、「進化と企業の問題」ではなく、「企業と進化の問題」とした理由である。

もっとも、このように企業に重点を置いた人間の進化を問題とするとき、わたくしは、「企業と進化の問題」を、企業発展の理論としての企業進化の理論を形成することを目的として、とりあげようとするわけではない。わたくしは、それを、また、企業の発展のための政策を提示することを目的として、とりあげようとするわけでもない。この二つの行き方は、今日、相関連する形で、少なからぬ数の著作のうちに見受けられるのであるが、わたくしの行き方は、このいずれの行き方とも異なっている。

わたくしは、企業の発展の問題を軽視するわけではない。わたくしは、むしろ、企業の発展の問題を重視しており、この問題の理論的解明に自ら多大の努力を傾けなければならないと考えている。それだけではない。わたくしは、自らの研究が企業の政策に何らかの示唆を与えること、しかも、後述する人間の

より良い生存という立場から、企業の発展のための政策に何らかの示唆を与えることをさえ願っている。しかし、それにもかかわらず、わたくしは、企業の発展の理論的解明それ自体を、ましてや企業の発展のための政策の提示それ自体を、わたくしの研究の目的としているわけではない。わたくしの研究の目的は、むしろ、有機体の一つとしての人間の進化の理論的解明にあるのであり、わたくしは、これを、とくに人間の進化が企業と関連する側面に焦点をあてて、なそうとするのである。

以下において、わたくしは、「企業と進化の問題」がわたくしにとってどのような意味をもつかを述べることによって、この問題の概略を示すこととしたい。そのためには、わたくしは、自らが、この問題をどのような関心から取り上げようとするのか、そして、この問題をどのような立場から、どのような構想をもって考察しようとするのか、を明らかにしなければならない¹⁾。わたくしは、この課題を、自らのこれまでの研究の過程の一端を辿ることを介して、果たすこととしたい。

2

わたくしが人間の進化と企業との関係を自らの研究主題として意識することとなった直接の契機は、K. R. Popper の二つの理論が自らの研究にとってもつ意味を自覚したことにある。この二つの理論の第一は、内部的淘汰の機構 (der innere Auslesemechanismus) の理論ないし内部的淘汰 (die innere Selektion) の理論であり、その第二は、世界3 (die Welt 3) の理論である。これらの理論は、以下のような事情において、人間の進化と企業との関係についての考察を、わたくしに促すこととなった。

わたくしは、学問研究を職業とするようになってからの最初の10数年間、ドイツ経営学ないし経営経済学の学説史的研究に従事した²⁾。わたくしが研究の対象としたものは、1910年代のはじめ頃から1930年代のはじめ頃にかけての諸学説であり、これらの学説において主要問題をなしていたものは、一つには、

企業、とりわけ工業的大企業についての理論をどのように構築していくかの問題、もう一つには、経営学的研究を一つの独立の科学ないし個別科学としてどのように形成していくかの問題であった。われわれは、第一の問題をドイツ経営学の研究内容の問題とよび、そして第二の問題をその研究方法の問題とよぶことができるであろう。

ドイツの経営学界にとって、1910年代のはじめの頃は、設立後約10年を経た商科大学において、主として私経済学 (Privatwirtschaftslehre) の名称で、ようやく体系的な研究が現れはじめた時期であり、ついで、第一次大戦後の10余年は、経営経済学 (Betriebswirtschaftslehre) の名称が一般化するとともに、その内容的充実が図られた時期である。この二つの時期のうち第一の時期は、他方で、ドイツの経済学界ないし国民経済学界において、いわゆる価値判断論争が展開され、国民経済学の方法の問題、とりわけ政策論の客観性と価値判断の問題が、大方の注目を集めていた時期であった。

ドイツの経営学界と経済学界とにおけるこのような時期の重なりは、経営学界に対して、ある重要な事態をもたらすことになる。この事態は、価値判断論争の渦中にあった国民経済学者のいく人かが、商科大学において国民経済学とは別個の新しい経済学として形成されつつあった経営学的研究に関心をもち、この学問の性格をめぐってさまざまな議論を展開したことに起因する。

かれらの多くは、商科大学の経営学的研究を企業経済政策論ないし私経済技術論³⁾として理解する。そして、これが、国民の福祉という全体的利益に奉仕する国民経済学と異なり、企業者の利潤という特殊階級の私的利益ないし特殊利益に奉仕することを問題とし、このことを一つの理由として、商科大学の経営学的研究が一つの独立の科学として形成されうることを否定したのである。

このような主張は、特定の価値についての道徳的判断、したがって一つの価値判断を科学の基準とするものであり、このことは、この主張者達がしばしば採用する M. Weber の考え方の恐るべき無理解を示すものであって、Weber の考え方からすれば、むしろ反批判されるべきものであった⁴⁾。しかしながら、それ

は、経営学的研究が一つの独立の科学として形成されうることを否定するものであり、しかもこの否定が道徳的非難にもとづくものであったために⁵⁾かえって、私経済学ないし経営経済学に携わる研究者に大きな作用を与えることとなった。それは、この学問の研究方法の問題のみならず、研究内容の問題にも、重大な影響を及ぼすことになったのである。

ところで、以上のような国民経済学者の主張とこれに何らかの影響を受けつつ研究を進めていった私経済学者ないし経営経済学者の著作とを検討することによって、わたくしは、つぎのような相互に関連する諸問題を、自らの問題として確認することになった。

- (1) とりわけ価値判断との関連における社会科学的認識の客観性の問題、そして、さらに、科学的認識の客観性そのものの問題
- (2) 企業の問題、とりわけその目的としての価値(利潤)の内容と型の問題、そして、さらに、この価値と社会的価値との関係の問題
- (3) 企業の研究としての経営学の社会的価値の問題、そして、さらに、学問ないし科学そのものが人間にとってもつ価値の問題

以上三つの問題は、いずれも、素朴な形においてではあれ、学部⁶⁾の学生であった頃から、わたくしが抱懐していたものであり⁶⁾、わたくしは、それを、職業的研究者としてドイツの私経済学ないし経営経済学に関する諸学説を研究することによって、再確認したのである。そして、その後のわたくしは、この三つの問題についての考察を続けることとなった。

第一の問題のうち、価値判断と社会科学的認識の客観性については、わたくしは、それまですでに断片的に読んでいた M. Weber の著作およびかれの学説についての諸研究を少しずつ読み続けるとともに、G. Myrdal の所説を考察し、認識ないし事実判断が、これから区別される価値判断と深い関連をもち、これによって影響され、しばしば歪められること、このような認識の歪みを防止す

る一つの方法として、研究の前提となる価値ないし価値判断をできる限り明示するよう努力することが有効であることを知った。わたくしは、また、研究の前提となる価値にもとづいて形成される論理的に完全な構成物としての理想型によって社会的事象を把握しようとする Weber の方法に依拠して、F. Schönpflug のいう規範科学について一つの理想型を形成し、このことによって、価値についての一つの特色ある考え方である客観価値論の論理構造を明らかにするとともに、規範科学のこの理想型との対比において、(価値判断の関連する側面について、)経験科学の二つの理想型を形成し、これらの理想型によって諸学説を把握しようとした。⁸⁾

第一の問題の科学的認識の客観性そのものについては、わたくしは、Weber の著作の他に、いく人かの自然科学者の著作、そして、とりわけ K. R. Popper の諸著作から、いくつかの示唆を与えられた。わたくしは、Popper が *Historicism* とよぶものについて用いている方法⁹⁾が、M. Weber の理想型による方法と同じであることに気付くとともに、この方法が適用可能な問題分野について思いを巡らせることになった。また、K. Lorenz を中心とする動物行動学者達の著作から、有機体の一つとしての人間の認識の特異性と相対性とを自覚させられることになり、¹⁰⁾ Popper のいう理論の仮説としての性格を、この自覚との関連において理解するとともに、とりわけ相対性について、この思想が M. Weber, H. Rickert に連なるものであることに想到した。

第二の問題の最初のものについては、わたくしは、主として、学部の学生時代に出逢うこととなった藻利重隆博士の企業の指導原理としての営利原則の発展の理論¹¹⁾を考察し、企業の指導原理について、その歴史的発展ではなく、むしろ M. Weber の意味での理想型を理解することとなった。生産的営利原則と寄生的営利原則とがこれである。¹²⁾ わたくしは、この二つの理想型によって今日の企業行動を理解するとともに、生産的営利原則を優れて表している Fordism が M. Weber のいう資本主義の精神といかによく対応しているかに驚嘆し、企業についてのわたくしのこれからの研究の方途を、上記の二つの理想型につい

での考察を深めることに見出すこととなった。

企業の目的としての価値と社会的価値との関係の問題については、わたくしは、上記二つの営利原則がどのような社会的帰結をもたらさうかを考察し、二つの営利原則に対応する二つの社会についての理想型の構成を試みるとともに、これからの研究の方途を、この理想型の検討に見出すこととなった¹³⁾

第三の問題については、わたくしは、すでに、ドイツの経営学説史についての著書¹⁴⁾の最終章において、企業の研究において自らがとる立場を社会的価値の立場に求めるとともに、その理由を示していたのであるが、その後、わたくしは、人間の価値判断、とりわけその一つである倫理的判断、から区別される人間の实在判断ないし認識行為としての科学研究が、倫理的判断から独立して追求されることは許されるべきではなく、むしろ、これによって規制されるべきである、と確信するようになり、このような確信から、企業を研究する立場として自らが社会的価値の立場をとることを再確認するとともに、このような立場をとる研究に社会的価値を認めることとなった。そして、わたくしは、さらに、社会的価値を倫理の一つとして相対化し、倫理の内容を、人間のよりよい生存、さらにはこのための多様な生命ないし生物の存続、に関連させて理解するようになった。

そして、以上のような考察を進めていくうちに、わたくしは、以上三つの問題のいわば基底にある、つぎの問題をも考察することとなった。

- (1) 以上三つの問題の共通の基底の一つをなす価値は、そもそも、どのような性質をもっているのか。
- (2) この価値と密接に関連する認識は、どのような性質をもっているのか。

わたくしは、一般に、価値という言葉が、価値あるものごとを意味する場合と、何らかのものごとに結びつけられる価値を意味する場合との広・狭二義において用いられていることを手掛りとして、価値の性質を考えることになっ

た¹⁵⁾そして、広義の価値におけるものごと、すなわち狭義の価値が結びつけられるものが、われわれの認識の対象となる何らかの实在そのものではなく、この対象についてのわれわれの認識成果ないし認識像すなわち対象観念であり、これに結びつけられて広義の価値を構成することとなる狭義の価値も、また、一つの観念であること、したがって広義の価値が観念に他ならないことに気づくとともに、これらの観念が、これらを形成する主体に依存することに思い至ったのである。しかも、わたくしは、K. Lorenz の一連の著作、さらには C. G. Jung の一連の著作および Jung に関連する河合隼雄、林道義両氏の著作¹⁶⁾によって、この主体が、個体としての特性のみならず、個体が属する文化の特性、そしてさらには人間という類の特性をもち、これらが、その観念形成を規定することを知ることとなった。

Popper の内部的淘汰の理論と世界 3 の理論が自らの研究にとってもつ意味にわたくしが気付いたのは、以上のような思考の段階においてであった¹⁷⁾

3

Popper は、有機体の進化において、外部的淘汰圧 (der äußere Selektionsdruck) すなわち環境によって規定された淘汰圧のみならず、内部的淘汰圧 (der innere Selektionsdruck) すなわちその有機体みずからに由来する淘汰圧が決定的作用をもち、しかもこの内部的淘汰圧は、結局は、その有機体の選好 (Präferenzen) ないし目標設定 (Zielsetzungen) に由来すると考える¹⁸⁾

かれによれば、選好は、有機体の進化に、つぎのように作用する。いま、何らかの有機体が、環境の変化に対応して、その行動において試行的に選好を変化させたとする。この選好の変化が新しい生態学的地位 (ökologische Nische) の発見へと至るとき、この選好の変化は、新しい淘汰圧となる。それは、この有機体種のなかで新しい選好を多少とも先取りしこれに予め備えている選好遺伝子をもつ個体を有利にし、このことによって、この有機体種の選好遺伝子を変化させる。このように、ある有機体種の選好遺伝子が増えるとき、新しい

選好に対する技能 (Geschicklichkeit) において優れている個体が有利となり、このことは、この有機体種の技能遺伝子を変化させる。そして、この技能遺伝子の変化は、新しい技能にとって好都合な解剖学的構造 (Aufbau der Anatomie) の変化を有利にし、この有機体種の解剖学的遺伝子を変化させる。

以上において、環境の変化が外部的淘汰圧を意味し、選好の変化、技能の変化そして解剖学的構造の変化が内部的淘汰圧を意味することは、いうまでもない。

以上のうち、選好の変化によって始まる淘汰の機構を、Popper は、内部的淘汰の機構とよび、これをつぎの式で示している。

$$P \rightarrow G \rightarrow A$$

ここに P は選好を、 G は技能を、 A は解剖学的構造を表す。

Popper は、この内部的淘汰の機構において、選好が、とりわけ重要な位置を占めることを強調する。新しい選好こそ、内部的淘汰の機構をいわば起動させるからである。かれによれば、このような内部的淘汰の機構は、有機体の進化が方向をもつこと、すなわち定向進化的発展傾向 (die Orthogenetischen Entwicklungstendenzen) を示すこと、の理由をなす。そして、有機体のこの定向進化を喚起するものこそ、新しい選好の出現、とりわけ新しい選好遺伝子の出現なのである。

わたくしは、Popper のこのような選考が、わたくしの考えていた価値と同じものであることに気づくことになり、このことによって、わたくしは、価値の問題を進化論との関連において見直すこととなった。わたくしは、価値の発生と発展が有機体の、とりわけ人間の、進化において有する重要性を意識し、これに考察の目を向けることとなったのである。

さらに、わたくしは、以下に述べるように、Popper のいう世界3について、これが、科学的理論のみならず、価値のなかでわたくしが制度化された価値と

よびたいものを含み、この価値の一つとしての経済制度、とりわけ企業を含むことに気づいた。そして、わたくしは、また、このような世界3が進化論と結びつけられることを知った。

Popper は、「物体」の世界 (die Welt der Dinge) ないし物理的対象の世界 (die Welt der physikalischen Objekt) を世界1 (die Welt 1) とよび、これに対して、例えば思考過程 (Denkprozesse) のような主観的経験の世界 (die Welt der subjektiven Erfahrungen) を世界2 (die Welt 2) とよぶ。さらに、かれは、この二つの世界に加えて、命題自体の世界 (die Welt der Sätze an sich) を考え、これを世界3 (die Welt 3) とよぶ¹⁹⁾

この世界3は、かれによって、思考過程から区別される思考内容 (Denkinhalt) の世界、この意味で理念 (Idee) の世界、さらには、問題の世界 (die Welt der Probleme)、理論の世界 (die Welt der Theorien) そして批判的議論の世界 (die Welt der kritischen Argumente) ともよばれている。

世界3は、思考過程 (世界2) によって作られる。しかし、それは一度作られると、思考過程とは別個の独自の存在となる。それゆえに、それは、世界2によって理解され、誤解され、また批判される対象となりうるのである。それだけではない。それは、例えば、あるひとの思考過程によって発明された数学が、発明した人間の思いもよらない独自の問題を含んでおり、これが思考過程によって発見されるように、発明した人間の意図や予想 (すなわち思考過程) を超える内容を含みうるのである。

Popper は、世界2のみならず、世界3が、(部分的に) 世界1に属する机や椅子と同じく、実在する (real od. wirklich sein) と考える。その理由は、それらが世界1に作用する (wirken) ことにある。

かれによれば、世界1は、世界3に作用するのであるが、それだけでなく、世界3も、世界1に作用する。二つは相互に作用するのである。例えば、世界1について形成された Maxwell や Herz の理論は、もちろん、世界1の作用を受けているのであるが、これらの理論の内容、すなわち世界3の要素は、また、

世界1に作用しこれを著しく変化させてきたのである。このことから、ひとは、世界3が実在することを認めざるをえない。この場合、Popperによれば、世界1と世界3とは、世界2が両者と相互作用をもち、両者をいわば仲介することによってのみ、相互に作用するのであり、このことは、また、世界2の実在性をも示すのである。

さて、わたくしは、さきに、Popperが、世界3を、問題の世界、理論の世界そして批判的議論の世界、とよぶことを述べた。そして、わたくしは、かれのこのような論述にしたがって、世界3を明らかにしようとしてきた。だが、かれは、世界3をこのような世界としてのみ、理解するわけではない。

かれによれば、問題の世界、理論の世界、批判的議論の世界は、世界3の一つの特例 (ein Sonderfall) であり、一つの狭義の世界3 (eine Welt 3 im engeren Sinne) として理解されなければならないものである。それは、世界3の言語的ないし論理的ないし知的領域 (die sprachliche oder logische oder intellektuelle Provinz der Welt 3) をなすにすぎないのであり、世界3自体は、さらに一般化されなければならない。このようにして、かれは、より広義の世界3として、とりわけ芸術作品そしてさらに工具や社会制度など、人間精神のあらゆる産物 (alle Produkte des menschlichen Geistes) を含む世界を理解するのである。

Popperが世界3をこのように一般化する理由の一つは、かれが世界3が歴史をもつと考えることにある。この歴史は、人間の理念の歴史 (die Geschichte unserer Ideen) である。それは、理念の発見 (Entdeckung) の歴史であるだけでなく理念の発明 (Erfindung) の歴史でもある。そして、Popperによれば、世界3をこのようなものとして考えるとき、われわれは、これと、人間を動物の一つと見る進化論とを結びつけることができる。人間の世界3は、その先駆者として蜘蛛の巣や鳥の巣のような、人間以外の動物の産物をもつのであり、このようなものの一つとして考えられなければならない。

以上のようなPopperの論述から、われわれは、第一に、世界3が社会制度を

含み、したがってその一つとしての経済制度、とりわけ企業を含みうるものであることを確認することができるであろう。そして、われわれは、第二に、Popperがこのような世界3を進化論と結びつけようとする意図を有していたことをも、確認することができる。

この二点は、わたくしにとって重要な意味をもつ。なぜなら、それらは、わたくしに、企業についての新しい研究方向を示唆するからである。それらは、企業を人間の進化との関係において考察する可能性を、わたくしに示唆する。しかも、Popperのうちに、わたくしは、この考察の可能性を現実化する一つの手掛りを見出すことができる。企業の理論を内部的淘汰の理論と関連づけ結合することが、これである。

しかしながら、わたくしのこのような研究方向にとって Popper が示唆するものは、これまでである。わたくしが知る限り、Popper においては、世界3と進化論、とりわけ内部的淘汰の理論、との関連については、わずかに断片的論述が存在するにすぎない。かれは、この両者をいかに結合するかを、たとえその大略的構想としてさえ示しているわけではない。そして、また、かれは、世界3の要素としての社会制度はもちろんのこと、世界3の要素としての企業について、何らかの具体的論述を展開しているわけでもない。これらは、未解明の問題として残されている、といわれなければならない。

4

そこで、わたくしは、つぎのことを、自らの当面の課題としたい。その第一は、Popperの世界3の理論と進化の理論とりわけ内部的淘汰の理論との関係を考察し、両者を結合して、内部的淘汰の理論よりもさらに包括的な理論を構成するよう試みることである。

世界3の理論と内部的淘汰の理論とを結合しようとする努力は、一つには、Popperの世界1,世界2,世界3と内部的淘汰の機構の要因 P , G , A との関係の考察を要請するであろう。わたくしの推測を予め述べるならば、かれのいう

三つの世界のうち、世界2、そして世界1の一部は、有機体とりわけ人間の内部的要因としての P, G, A を構成する。これに対して、世界3は、 P, G, A と密接に関連するが、しかし、 P, G, A を構成しない。それは、内部的要因としての世界2によって形成されるが、しかし、内部的要因そのものではない。それは、いわば外部化ないし外在化された内部的要因である。しかも、この場合、それは、人間の内部的要因である世界2によって形成されるがゆえに、また、外部的要因そのものでもない。

この外在化された内部的要因としての世界3は、淘汰圧として、人間の P, G, A に著しい影響を与える。それゆえに、人間について進化の理論を考えると、われわれは、内部的要因のみならず、外在化された内部的要因としての世界3を含む淘汰の機構の理論を構成せざるをえない。このことが、Popperの内部的淘汰の理論を拡張し、より包括的な理論を形成することを意味するのは、明らかであろう。

わたくしの当面の課題の第二は、以上のようにPopperの内部的淘汰の理論を拡張しようとするとき、外在化された内部的要因としての世界3として、とりわけ企業をとりあげ、これと内部的淘汰の機構との関係を明らかにすることに、わたくしの考察の焦点を合わせることである。

わたくしが、外在化された内部的要因として企業を重視し、これと内部的淘汰の機構との関係を解明しようとするのは、わたくしがこれまで企業の考察を自らの研究の課題の一つとし、そしてとりわけ講義の中心課題の一つとしてきたことのみによるものではない。わたくしには、企業が、今日、人間の進化にとって決定的ともいわれうるほどに重要な要因だと思われるのであり、このことが、わたくしに、企業と人間の進化との関係、したがって企業と人間の内部的淘汰の機構との関係の考察を促すもう一つの理由である。

企業は、Popperの言葉を用いれば、人間の精神の産物の一つである。そして、それは、わたくしの理解するところでは、広義の価値の一つとして抱懐され、しかも、これが外在化されることによって存在する。この意味において、それ

は、外在化された価値である。そして、それは、人間によって形成されたものでありながら、人間を規定する。この場合、外在化された価値の一つとしての企業は、特定の一個人によって形成され、この一個人のみを規定するわけではない。それは、複数の個人によって形成され、複数の個人を規定する。この意味において、それは、社会性をもつ価値すなわち社会的価値の一つである。しかも、それは、人間の行動基準ないし規範として、複数の人間に特定の行動様式をとらせる。このように外在化され社会性をもつ規範としての価値を、わたくしは、制度化された価値または制度とよぶ。

このような企業は、それ自体の歴史をもつ。この歴史は、人間の精神ないし世界2との交流の歴史であり、また、世界2を介する世界1との交流の歴史である。それだけではない。それは、おそらく、世界2を介する、他の世界3の要素との交流の歴史でもある。それは、これらの交流による企業の進化の歴史である。ここに企業の進化とは、企業の発展のみならず、その衰退をも含むものとして理解されなければならない。そして、このような企業の進化の歴史を考察するとき、われわれは、ここに、企業の進化の機構を見出すことができるであろう。それは、Popperの内部的淘汰の機構を何らかの意味で改変した機構ともいうべきものであるかもしれない。なぜなら、われわれは、企業のうちに、あたかも人間における選好、技能、解剖学的構造にも似た要因とこれらの関連とを見出すことができるからである。先に述べた企業の指導原理は、この観点から考察されうるであろう。この機構の解明は、わたくしの課題の一つである。

だが、企業について特筆されるべきことは、それが、人間の選好と技能とに決定的ともいうべき影響力をもち、このことによって、その解剖学的構造にも影響を与えうることである。

企業は、複数の人間に対し、主として、かれらの生活に必要な物資ないし財貨を供給する制度として機能してきた。この意味において、企業は、人間の生活に必要な制度としての性質を有してきたし、このことは、現在も妥当しないわけではない。だが、今日においては、われわれは、企業を、このようなもの

としてのみ見ることができない。企業という制度の発展は、とりわけ、いわゆる大量生産革命以降、人間の生活に必要な範囲を超える財貨の生産と販売をもたらし、生産を拡大するために欲望を作り出すという企業行動を一般化させた。また、このために、企業は、その商品として、新しい財貨を開発するだけでなく、さまざまな用役を商品として開発することにも力を注ぎ、このことによって人間の生活様式を変化させるだけでなく、部分的には生活様式自体をも商品として開発し、これを生産し販売するようにさえなっている。このような企業行動は、企業による人間の選好の形成を意味することが注意されなければならない。

それだけではない。今日、企業は、多くの人々の技能にも影響を与える。いわゆる先進資本主義国では、多くの人々が、企業活動に従事することによって生産し、これによって得た賃金または給料によって生計をたてているのであるが、このことは、少なくともつぎの二つの意味において、人々の技能に影響する。

第一に、企業において働く人々の技能は、企業活動における技能として形成される。ここに企業活動とは、最広義における営利的商品生産活動をいう。それは、営利を目的として行われる広義の生産活動、すなわち営利を目的とする特定の商品の生産のための資源の調達、狭義の生産、販売の諸活動、これらに随伴する諸活動そしてこれらすべてを統合する諸活動のみならず、新商品の開発活動すなわち消費者としての人々に新しい選好を形成させる活動、を含むのである。

新商品の開発活動は、Schumpeter のいう企業者職能ないし革新職能の一つであり、目新しいものではないが、しかし、それがほとんどの企業にとってその生存の如何を決定するほどのものとなり、したがってそのための技能がとりわけ重要になってきたのは、すでに述べた大量生産革命後である。

企業に働く人々は、以上のような最広義の営利的商品生産活動に関わる技能を形成しこれを行使することによって生活の資を得るのであり、それゆえに、

かれらは、このような技能の形成と行使に努力する。

第二に、企業において働く人々の子供達は、しばしば、将来、企業において働くようになることを期待され、また自らもこのことを志向する。ここには、職業選択における一種の選好が形成されるのである。企業の発展は、このような選好を一般化する。このとき、子供達の教育は、企業における技能形成のためのいわば予備段階としての意味をもつようになる。とりわけ学校制度は、初等教育から高等教育に至るまで、企業における技能形成のための基礎的能力を形成する機関となる。

以上のように、企業は、人間の選好と技能とに影響を与える。この影響は、企業の発展とともに、ますます著しくなる。今日の都市においては、あたかも、企業という世界3の一要素に、人々が支配されているかのようなのである。生物の一つとしての人間の生活は、その根底においては、他の多くの生物の基礎のうえにのみ成り立つのであるが、今日の都市においては、他の多くの生物と人間との交流が稀薄となり、人間の生活は、企業によって形成された選好と技能との人工世界において自己展開しているかのような様相をさえ呈している。²⁰⁾このような状況は、また、人間の解剖学的構造にも影響を与えないではおかないであろう。

このように、企業が、人間の進化にとって、今日、決定的に重要な要因だと思われることが、わたくしに、外在化された内部的要因としての世界3の要素のうちでとりわけ企業に注目させ、これと人間の進化、とりわけ内部的淘汰の機構、との関連に考察の焦点を合わさせることとなる理由の一つである。

5

以上から、企業と人間の進化の問題をとりあげようとするわたくしの関心がどのようなものであるかは、明らかであろう。わたくしの関心は、企業が人間の進化にどのような影響を与えるかを明らかにすること、別言すれば、人間の進化における企業の意味の解明にある。

わたくしのこの関心は、企業と人間の進化の問題を考察する場合のわたくしの立場を、ある程度、規定する。わたくしの立場は、企業の利害の立場ないし企業の立場そのものではない。わたくしは、企業が人間の生活において決定的な役割を演じていることを認め、また、企業が将来においても人間の生活に不可欠の要素であり続けるだろうと考えるけれども、それにもかかわらず、わたくしの研究の立場は、企業の立場ではなく、企業を形成し、これとの関わりによって生きることとなっている今日の人間の立場である。

それだけではない。わたくしは、人間が生物の一つであり、人間以外の多様な生物との関連においてのみ生存しうるものであると考え、したがって、人間は、これらの生物との関連において理解されなければならないと考えるがゆえに、わたくしがとろうとする人間の立場を、人間を中心としながらも人間を多様な生命の一員とみる立場として理解する。この立場は、多様な生物との関連における人間の立場、さらには、多様な生物との共生における人間の立場、と言い換えることのできるものである²¹⁾

このような立場から、わたくしは、とりわけ人間について、Popperの進化の理論を再考しようとする。わたくしは、かれのいわゆる世界3の要素のうちから企業をとりあげ、これと、かれの内部的淘汰の理論とを関連させようとする。このことによって内部的淘汰の理論を拡充し、より包括的な淘汰の機構の理論を形成するよう試みることに、これが、わたくしの研究の構想である²²⁾

このような研究は、人間の進化について、これまでの経過と現在とを、われわれによりよく理解させ、さらに、人間の進化のこれからの可能性について、われわれに何らかの示唆を与えるであろう。このようにいうとき、わたくしは、わたくしの研究が人間のとるべき具体的施策を直接に提示しうる、と考えているわけではない。しかし、わたくしは、わたくしの研究が、やがて、人間のよりよい生存のために人間がとらざるをえない方向ないし行き方を、とりわけ企業との関わりについて、示唆することはできるだろう、と考えている。わたくしにとって、「企業と進化」という主題を研究することの意味は、それが、多様

な生命の一つとしての人間がいかにしたらよりよく生き続けることができるかという問題の解決に、少しでも貢献するところにある。

- 1) これは、G. Myrdal のいう研究における価値前提の明示の要請にある程度応じようとするものである。この要請については、つぎを参照のこと。

G. Myrdal, "Objectivity in Social Research", New York, 1969.

拙稿「社会科学における偏見の実在判断の形成と価値判断の処理」『香川大学経済論叢』第57巻第4号, 1985年3月。

拙稿「価値前提の選択と道徳的批判」『香川大学経済論叢』第58巻第1号, 1985年6月。

上に「価値前提の明示の要請にある程度応じようとする」と述べたのは、価値前提の内容が、研究の当初から明確であることは、ありえないからである。それは、研究者が研究の過程でつねに自らに問うことによって次第により明確になるものであり、しかも、この明確化の過程には、終点がない。

- 2) この最初の成果は、修士論文「ホフマン企業経済学の研究」1968年（一橋大学図書館蔵）であり、印刷物として刊行されたものとしては、「技術論的経営学の一考察—ホフマンの所論を中心として—」『一橋研究』第16号, 1969年2月, が最初のものである。その後、わたくしは、1971年に香川大学経済学部で「経営学史」の講義を担当することになってから、この講義の準備としてドイツの学説の研究に専心することとなった。その成果は、主として、『香川大学経済論叢』に発表されている。そして、1983年に、わたくしは、それまでの研究の一応のまとめとして、ドイツの企業政策論ないし技術論的経営学についての学説史的研究の書、『技術論的経営学の特質』千倉書房, を著した。

- 3) この場合、技術論 (Kunstlehre) をどのように理解するかは、これら国民経済学者において、そして国民経済学者の批判を受けた私経済学者ないし経営経済学者において、さまざまである。そして、この理解のあり方を、いくつかの代表的学説について明らかにすることが、前掲拙著の一つの課題であった。

わが国では、藻利重隆博士の規定（『経営学の基礎』（新訂版）、森山書店、1973年、第二章第二節を参照のこと）が、いわば通説となっているのであるが、しかし、この規定は、わたくしのみるところ、E. Sieber のそれであって、ドイツの研究者の一致した規定ではない。このことについては、つぎを参照のこと。

前掲拙著、第8章および287ページ注(2)。

- 4) のちに述べること（本論文の末尾を参照されたい）からも明らかなように、わたくしは、科学的研究における道徳ないし倫理を重視し、科学的研究が一種の倫理に従ってなされるべきであると考え。ここに一種の倫理とは、人間のよりよい生存という価値であり、わたくしは、この価値の立場から、科学的研究がなされるべきだ、と考えるのである。

だが、わたくしは、この場合、この価値を、ある研究が科学であるか否かの基準とは考えない。この価値は、科学的研究においてとられうる一つの立場をなす価値であり、この価値と異なる価値をその立場とする科学的研究も存在しうるし、また存在する。ただ、わたくしにとっては、人間のよりよい生存という価値は、わたくしが研究の立場としてとらざるをえない価値なのである。

- 5) 道徳的非難は、学説の綿密な論理的批判および経験的批判よりも、むしろ、はるかに大きな影響力をもっていたように見える。このことは、この当時のドイツの学界において道徳的価値がいかに大きな力をもっていたかを示すものであろう。そして、このことは、わずか10年程前までの日本の学界においても、見受けられたことである。

近年、日本の学界においては、学問が道徳から離れて追求される傾向がある。この傾向は、研究者のみにみられるものではない。それは、とりわけ、大衆化した学生に顕著な傾向である。現在の学生の多くは、例えば、藻利重隆前掲書の第一章に述べられているような、学生の悩みを理解できない。

- 6) 第一の問題を意識することになったのは、1960年のいわゆる安保闘争において、学生の一人として、何らかの政治的行動をとらざるをえない立場に置かれたとき、責任ある行動をとるために学問がはたして、また、いかに、決断のための客観的基礎となることができるかを考えたことによる。何人かの著名な社会学者が日米安全保障条約に反対することの正しさは自明であると主張するのを聴いたとき、わたくしは、この主張に疑問を抱き、とりわけイデオロギーという価値と学問の客観性との関係、そして学問ないし理論と実践との関係について頭を悩ませることになった。

第二および第三の問題を強く意識することになったのは、学部の専門課程において経営学を専攻することになった自らにとって、この学問がいかなる意味をもつかを考え、そして、企業に職を求めることにならざるをえないであろう自らの人生にとって企業における仕事がいかなる意味をもつかを思い悩んだことによる。わたくしは、これらの問題が、ともに、藻利博士の前掲書において直接的および間接的にとり扱われていることを知った。第三の問題は、1960年代の終りから1970年代の始めにかけての大学紛争において、大学解体を主張する人々が否定的意味でとりあげた問題でもあった。

- 7) つぎを参照のこと。

G. Myrdal, *Objectivity in Social Research*, New York, 1969.

拙稿「社会科学における偏見の実在判断の形成と価値判断の処理—ミュルダールの所論を中心として—」

拙稿「価値前提の選択と道徳的批判—ミュルダールの所論を中心として—」

- 8) とりわけ、つぎを参照のこと。

拙稿「規範科学の一理想型—価値判断と客観性—」『香川大学経済論叢』第59巻第2号、1986年9月。

拙稿「理想型」による認識と経営経済学の学派分類(一)『松山大学論集』第2巻第5号, 1990年12月。

拙稿「理想型と事実認識—理想型」による認識と経営経済学の学派分類(二)一」『松山大学論集』第6巻第6号, 1995年2月。

拙稿「理想型による認識と分類による認識—理想型」による認識と経営経済学の学派分類(三)一」『松山大学論集』第7巻第1号, 1995年4月。

拙稿「経営学と価値判断問題—経営学徒のみた価値判断問題—」『松山商大論集』第39巻第4号, 1988年10月。

拙稿「価値判断の客観性問題—経営学徒のみた価値判断問題—」『松山大学論集』第1巻第1号, 1989年6月。

9) Cf. K. R. Popper, *The Poverty of Historicism*, London, 1961. (久野収市, 井三郎訳『歴史主義の貧困』中央公論社, 1975)

林道義教授によれば, C. G. Jungの方法もまた, M. Weberの理想型(教授は, これを理想型と訳されている)を用いる方法と同じである。つぎを参照のこと。

林道義著『ユング心理学の方法』みすず書房, 1988年。

10) Lorenzの著作のなかでは, とりわけ, つぎのものをあげておくべきであろう。

K. ローレンツ著, 谷口茂訳『鏡の背面』上巻および下巻, 思索社, 1986年。

また, Lorenz以外のものとしては, とりわけ, つぎのものをあげておかなければならない。

ヤーコプ・フォン・ユクスキュル, ゲオルグ・クリサート著, 日高敏隆・野田保之訳『生物からみた世界』思索社, 1985年。

11) つぎを参照のこと。

藻利重隆前掲書。

12) 前者は, 財の生産によって利潤を得ることを内容とする原則であり, 後者は, 生産的営利原則によって得られる富の存在を前提とし, これに寄生して, 投機によって利潤を得ることを内容とする原則である。

13) 以上第二の問題については, わたくしは, 専ら, 「経営学原理」の講義で述べるにとどまっている。

なお, Fordismおよび営利原則とその社会的帰結については, とりわけ, つぎを参照のこと。

藻利重隆著『経営管理総論』(第二新訂版), 千倉書房, 1965年, 第三章。

向井武文著『フォーディズムと新しい経営原理』千倉書房, 1984年。

14) 前掲拙著のことである。

15) つぎを参照のこと。

拙稿「価値の実在性—価値判断と客観性—」『香川大学経済論叢』第60巻第2号, 1987年

9月。

拙稿「価値の構造(-)」『松山大学論集』第4巻第3号, 1992年8月。

拙稿「実在としての価値の概観—「客観的」価値と対比して—」『松山大学論集』第7巻第3号, 1995年8月。

16) 例えば, つぎを参照のこと。

ヤッフエ編, 河合・藤縄・出井訳『ユング自伝—思い出, 夢, 思想—』1および2, みすず書房, 1994年および1993年。

C. G. ユング著, 野田倬訳『自我と無意識の関係』人文書院, 1994年。

C. G. ユング著, 小川捷之訳『分析心理学』みすず書房, 1992年。

C. G. ユング著 林道義訳『元型論』および『続元型論』紀伊国屋書店, 1989年。

河合隼雄『ユング心理学と仏教』岩波書店, 1995年。

林道義前掲書。

17) つぎを参照のこと。

拙稿「ポパーの進化の理論と価値の問題」『松山大学論集』第4巻第5号, 1992年12月, 110・111ページ。

18) つぎを参照のこと。

K. R. Popper, “*Ausgangspunkte, Meine intellektuelle Entwicklung*”, 3. Aufl., Hamburg, 1984.

前掲拙著。

19) Vgl. K. R. Popper, a. a. O., SS. 263-272.

20) このような事態は, 藤原新也氏によって, 描写されている。つぎを参照されたい。

藤原新也著『僕のいた場所』文芸春秋, 1998年。

21) この立場は, 残念ながら, ますます現実性を増大し, 今日では, ほとんど緊急のものとなさえている。

22) この場合, わたくしは, Popper の理論が正しいと信じているわけではない。このことは, いうまでもないことである。

なお, Popper の思想の研究のなかで, わたくしが知るかぎり最も優れた書物として, つぎをあげておきたい。

小河原誠著『ポパー批判的合理主義』講談社, 1997年。